

大建築の聖地

2013.06 / Vol.5



第5回 旧島根県立博物館(後編)

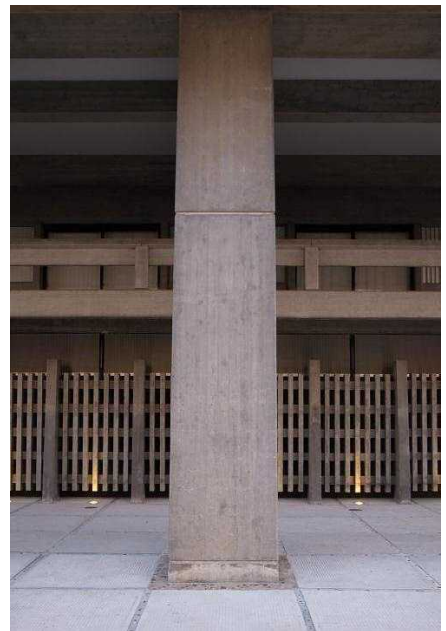
博物館よ、お前もか。

※1「棟持柱」：棟木を直接支える柱



博物館は、近代建築としては珍しい「棟持柱」(※1)をもつ建築です。菊竹氏はこの棟持柱のデザインに並々ならぬこだわりを見せています。

この柱はよく見ると上部へ行くにしたがって細くなるように作られていることが分かります。(下部90cm角→上部80cm角)これは下から見上げた時に柱が安定して見えるようにするためと考えられます。このような視覚補正は、ギリシャ建築などにも施されているもので、モダニストでありながら歴史的な建築にも深い関心を寄せていた菊竹氏らしいデザインと言えます。



言われなければ気付かないほど微妙なデザインですが型枠の加工には高い技術力が必要であり、施工した大工の腕の良さを物語っています。

また、ピロティ部分の棟持柱は「じゃんか」がほとんどない、素晴らしい出来ですが、実はこの柱の美しさにも秘密があります。……すでに察しが付いていらっしゃるかも知れませんが、そう、コンクリートを流し込む時に、命綱を付けて井戸の底のような柱型枠に潜り込み、流し込まれたコンクリートを締め固める作業をした人がいるからです。

県庁舎のピロティ柱と同じことを、実は博物館でもやっていたのです。

県庁舎の柱型枠に入った人が誰かは分かっていませんが、博物館の方は名前まで分かっています。工事監理のため松江に常駐していた菊竹事務所元所員の小川惇氏(※2)です。当時、大学を出て菊竹事務所に入所する若者と言えばエリート中のエリートと言っても過言ではないと思われませんが、そのエリートが命綱をつけて型枠の中に飛び込んでいくのですから、菊竹事務所の仕事振りは、文字どおり「命がけ」であったことがうかがい知れます。

また、この柱の足下の土間仕上げも非常に手が込んでおり、木型押しによるワッフル模様の周囲に碎石や陶片がランダムに埋め込まれた縁取り装飾が施されています。この縁取り装飾は小川氏自身の手によるもので、見ているだけで楽しい気分になってきます。



※2 小川惇(1932-)建築家。明治大学建築学科卒業後、小川惇建築設計事務所を経て久慈設計(岩手県盛岡市)代表取締役会長。代表作に「カトリック盛岡ドミニカン修道会」、「北上市立鬼の館」、「水沢市立黒石小学校」など

松江城への意識



菊竹氏は松江城を強く意識しながら設計に取り組んでいたため、博物館にも随所にお城を彷彿とさせるデザインが現れます。(※3)

まずは外観の白壁と黒壁との対比です。上階を白壁、下階を黒とすることで、松江城の色彩との調和が図られています。白セメント塗りの白壁は姫路城の“昭和の大修理”に関わった左官職人が手掛けたもので、菊竹氏にとって最も思い入れの深い仕上げだったようですが、残念ながらその後アクリル系の吹付け仕上げで上塗りされ、残存しません。



ホールの階段脇にあるいぶし瓦タイル張りの壁も、松江城の屋根瓦を意識したものであると同時に、城山の石垣もイメージさせるものとなっています。おそらく松江市内の瓦工場で博物館のために特別に焼かれたものと思われるが、現在は県内にいぶし瓦を作る工場がなくなり、再現の難しい貴重な仕上げと言えます。

2階南側の壁にリズムカルに穿たれた小窓はフランスの建築家ル・コルビュジエのデザインの影響を受けたものと言われています。しかし、コルビュジエなら省略するであろう木枠を窓周りに入れたり、形状が「正方形」と「縦長の長方形」に限定されているところを見ると、松江城の塀に見られる「矢狭間(正方形)」と「鉄砲狭間(縦長の長方形)」のデザインをコルビュジエ風のデザインと融合させたものであるように思われます。(※4)壁の屋外側を黒、屋内側を白と塗り分けているところも、松江城の塀と共通です。



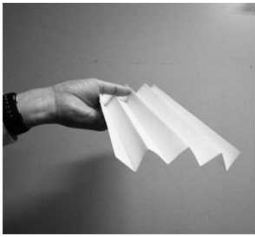
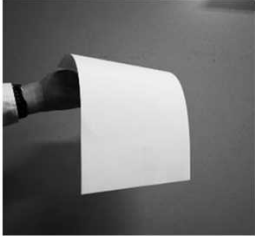
※3 梁の先端に付いている「葵の御紋」。実はただの飾りではありません。一体何のためのものか分かりますか？ 正解は「柱の中に埋め込まれた縦どいの掃除口」です。ただし高所作業車がなければ手が届かない位置にあるため、建設後ほとんど開けられることはなかったようですが……。



※4 菊竹事務所元副所長の遠藤勝勸氏によれば、博物館の設計をしていた頃の菊竹氏はコルビュジエの影響から何とか脱しようと試行錯誤していた時期にあったそうです。松江城の歴史的な意匠にその突破口を見いだそうとしていたのかも知れません。

屏風のような屋根 — 折板構造 —

※5 薄い紙も屏風のように折り曲げると強くなります。



博物館の屋根はまるで折り紙のような不思議な形をしています。これは「折板構造」と呼ばれるもので、鉄筋コンクリートの屋根版を波形にすることにより、屋根版の厚さはそのまま強度を増すことができます。(※5)

菊竹氏がこのような特殊な屋根構造を採用した理由は、構造的な強さはもちろんのこと、その後周辺に林立していくであろう高層ビルから見下ろしたときの意匠的な面白さを狙ったことでした。

並の建築家なら、屋上は周囲から目に付かない“裏側”と考えがちですが、菊竹氏は松江の未来の都市景観を思い描き、その一部として屋根をデザインしたのです。

建築の枠を超えて、都市に対する強い関心を生涯失わなかった菊竹氏らしさが、博物館の屋根から見て取れると思います。



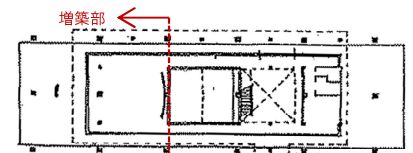
博物館と「メタボリズム」

博物館は、将来的な収蔵品の増加を見越して、新築の設計図と一緒に増築計画図まで作成されています。博物館の構造体は「金太郎飴」のようにどこで切っても同じ断面形状しており、同じ架構を継ぎ足して行けば(土地がある限り)延長していくことが可能です。

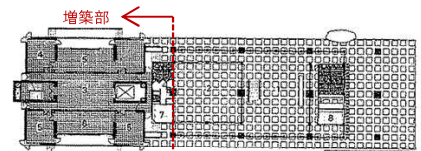
そして新築から10年後、西側へ新館が増築されました。当初の増築計画と比べると平面図や構造形式など異なる点も見られますが(※6)、基本的には「くら」と「ざしき」のコンセプトを維持しつつ増築されています。

「更新・成長する建築・都市」を標榜するメタボリズムの中心的な人物であった菊竹氏にとって、増築は重要なテーマでしたが、様々な事情から、当初のコンセプトを維持したまま増築された作品はあまり多くありません。

今後、菊竹氏の業績についての研究が進められていく上で、博物館は極めて重要な建築であると言えるでしょう。



増築計画図(1957年時点)



実際の増築図(1968年時点)



新館全景

※6 当初の増築計画では、主として展示室や集会室等の拡張が想定されていましたが、実際の増築では収蔵庫・事務室等の管理部門と、空調機械室・エレベータシャフト等の設備室の新設が中心となりました。建物を垂直に貫くエレベータシャフトの壁を主な構造体として利用するため、既設建物(柱-梁構造)とは異なり壁式構造が採用されています。既設建物の構造をそのまま延長するような形にはなりませんでしたが、菊竹氏は「かえってこれが現実の姿であり、造形的表現の強さにもなった」と積極的に評価しています。

◇ 参考文献
島根県『島根県庁周辺整備備誌』(1972)
菊竹清訓『菊竹清訓 作品と方法 1956-1970』美術出版社(1970)
SD編集部『SD8010 特集-菊竹清訓』鹿島出版会(1980)

◇ 次回は旧島根県立博物館の耐震補強工事についてお話しします。